



学園花の村機関紙第81号

2014年10月3日(金)

編集兼発行人 松井道夫

TEL

(0537) 24-0101

Fax

24-0242

入れ歯の平和論

津野 幸人

自分の入れ歯を眺めると、肉食獣のシンボルである犬歯は退化して門歯並みになり、奥に頑丈な臼歯が並んでいる。つくづく人間の本性は平和な草食獣だと想い知らされる。アフリカの牧畜民の生業地帯―表土が浅くて農耕に適さない―を旅行している時、便意を催したので草むらの中の空き地を選んで、ズボンを下ろしてかかんでいると、案内人がやって来て、ライオンに襲われるから、見晴らしのいい岩の上で用を足せと忠告した。このとき、自分もライオンにとっては餌の一種に過ぎないのだと痛感した。草食獣にしても肉食獣にしても他の生き物を食べなければ生きていけない。「植物は殺生しないで生きていけるから幸せだ。」こう言うと「食虫植物があるではないか」と反論する人がいた。だが、特殊事例で一般法則の否定はできぬ。

人間は、食糧を自らが生産することができ、その結果として文化を創ったのである。その中で筆頭に挙げるべきは宗教の創出ではなからう

の倫理・道徳が生まれた。

どの民族でも固有の宗教を持ち、その初発形態の多くは超能力への畏敬と自然崇拜であって、アニミズムであり、多神教である。食糧生産力の向上は都市の発生を促したのであるが、市民の行動を律するためには王権を必要とした。この王権は武力と宗教で支持された。宗教を司る神官は呪術・祈祷によって王権に奉仕し、自らの地位を確保したのであるが、神官集団を束ねるためには共通神が必要であった。このような訳で宗教は多神教から一神教化へと変容の道程をたどると私は考察する。

やがて、呪術的宗教は、人間の理性に訴えるところの理性宗教の出現で飛躍する。その魁(さきがけ)が釈尊の教えである。

周知のとおり、古代インドではバラモン教とその司祭者であるバラモンが絶大な権力を握って、その呪術力を競った。この状況のもとで、呪術に頼らない―神への救済を求めない―で自力によって我執を制する法を説き、解脱に至る道を示したのが釈尊の教えであった。

釈尊は信仰の拠り所を「自らを島とし、自らをたよりとして、他のものをよりどころとせずにあれ。」

法(真実)を求めることは自らが正しく生きることである。ここには呪術や祈祷の入りこむ余地はない。あくまでも人間の理性に訴えかけているのだ。その透徹した平等論と慈悲の教えは、バラモン教による身分差別の桎梏に苦しむ人々の心をつかんだ。

しかし、釈尊の教えを実行するには家族を捨てて出家しなければならぬ。この出家者集団の生活を支えるのが在家俗衆による布施・寄進である。また、出家者集団の行動を戒めるのが戒律であり、その第一が「不殺生戒」だ。

その後、在家信者にも戒律の遵守が要請されたのであるが、土壌生物の棲む農地を耕す農民には不殺生戒を守ることは出来ない。戒律遵守は出家にして初めて可能なのである。が、「不殺生戒は守れない、米でも麦でも生き物だ」と公言して憚らない浅はかな日本の僧侶もいる。

自然界の動物は、「種が同じものを食物としない」という種内における不殺生戒を確立している。領土と工業資源のために戦争で血を流すのは、万物の霊長と自称する人間だけだ。人間も他の動物並みに同種である人類を殺すのを止めようではないか。平和の基礎は食糧自給である。この実現を理性的に考えてみよう。